HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	教職志向を高めた対話的Project-Based Learning ： 教師を目指すビジョンと未来への学びデザイン
Author(s)	永山, 昌史; 佐々, 祐之; 内山, 隆 他
Citation	高等教育ジャーナル ： 高等教育と生涯学習, 31, 37-46
Issue Date	2024-04
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.31.37
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91702
Type	departmental bulletin paper
File Information	HighEdu.31_p37-46.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/J.HighEdu.31.37
J. Higher Education and Lifelong Learning **31** (2024)
〈Report〉

Conversational Project-Based Learning for Increasing the Motivation to Become a Teacher: Vision of the Kind of Teacher One Aspires to Be and Learning Design for Realizing It

Masafumi Nagayama[1)*], Hiroyuki Sasa[2)], Takashi Uchiyama[3)], Kenji Yamanaka[1)] and Toshie Suzuki[4)]

1) Hokkaido University of Education, Asahikawa Campus
2) Hokkaido University of Education, Sapporo Campus
3) Hokkaido University of Education, Kushiro Campus
4) Think Tank for Vison of Future Education

教職志向を高めた対話的 Project-Based Learning ―教師を目指すビジョンと未来への学びデザイン―

永山　昌史[1)**]，佐々　祐之[2)]，内山　隆[3)]，山中　謙司[1)]，鈴木　敏恵[4)]

1) 北海道教育大学　旭川校
2) 北海道教育大学　札幌校
3) 北海道教育大学　釧路校
4) シンクタンク未来教育ビジョン

Abstract ― Herein, we report the implementation of project-based learning (PBL) as a part of "Theory of Teaching Profession," a lecture for first-year students in the teacher training course in our university. First, the goal of becoming the kind of teacher that could conduct educational activities based on their own favorites or specialties was presented. Students took the PBL lecture consisting of alternately watching lecture videos and engaging in dialogue among themselves. They gradually clarified the unique educational activities that only they could conduct through the dialogue. Thereafter, the students explored lectures held in their university and social resources, including as things, people and places, with a view to utilizing them for the educational activities. Finally, each student described their own 4-year learning design in a sheet as the PBL outcome. According to the post-survey, the motivation of becoming a teacher was elevated in at least 50% of students, suggesting that the attitude of independently thinking about one's own future was promoted.

(Accepted on 6 January 2024)

*) Correspondence: Hokkaido University of Education, Asahikawa Campus, Asahikawa 070–8621, Japan
E-mail: nagayama.masafumi@a.hokkyodai.ac.jp
**) 連絡先：070–8621　旭川市北門町 9 丁目　北海道教育大学旭川校

1. はじめに

平成 29 年改訂の学習指導要領をひと言で表現するならば,「主体的・対話的で深い学びの実現」となるだろう。すなわち，教師中心から学習者中心の学び（アクティブラーニング）への転換である。文部科学省（2022）が示した「教師に共通的に求められる資質の具体的内容」にも,「子供たちの主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うなど，学習者中心の授業を創造することができる」と明記されていることから，養成段階において学習者中心の学びを理解, 体験, 修得できるようなカリキュラムが求められるのは必然である。

このような要請に応えるべく，北海道における教員養成の拠点的役割を担うことをミッションとする北海道教育大学（以下，本学）は第 4 期の中期計画の一つとして下記を掲げた。

【中期計画 3】

専門教育において,「課題解決型学習」の視点を強化し，課題探究能力や客観的・論理的思考力の育成を進める…（中略）…学生に幅広い視野を持って客観的立場から課題解決に取り組むことのできる力を身に付けさせる。（北海道教育大学，2022）

この中期計画を達成するため，著者らによる作業部会が組織され，2022 年度から取り組みを開始した。課題解決型学習（Project-Based Learning；PBL）は，①準備：課題発見，②ビジョン・ゴール：目的・目標の設定，③計画立案，④情報獲得・課題解決，⑤制作，⑥プレゼンテーション：知の共有，⑦再構築：改善・フィードバック，⑧成長確認といったフェーズ（段階）から構成されており，学習者は教師の助言を受けながら能動的に学習を進めていくことになる（鈴木，2017)。「正解なき学び」や「意志ある学び」とも称されるように，PBL は学習者自らが課題を発見・設定・解決する能力を養うことを目的とする点において，教師が知識を教授する従来型の学びとは大きく異なるものである。そこで，学外から特別講師を招聘し，学生の主体性や深い思考を促すために対話ベースで PBL の基礎を学ぶ講義を教員養成 3 キャンパス（札幌校，旭川校，釧路校）の共通講義として，入学直後の 1 年生前期に導入することを取り組みの出発点とした。

本稿では，2023 年度に初めて実施したこの講義について，まず講義づくりの過程から実際に実施した内容と方法を述べる。授業時数の制約で PBL 全体の基本的知識と上述のフェーズ①②④⑧に絞らざるを得なかったものの，学生自身のなりたい教師像（未来像）をビジョンとすることで PBL を通じて教職志向の高まりを目指す点が教員養成たる本学の独自性であり，詳しく説明する。続いて，題材によらず PBL によって共通して修得できる 35 の力（鈴木, 2017）と今回の題材「自分の得意や好きなことを活かせる教師を目指す」に関連する 7 つの力に着目し，PBL 基礎の理解度と教職志向や自分の未来への想像力を学生の自己評価をもとにそれぞれ効果検証を行ったところ，高まりが確認されたため，その結果について報告する。

2. PBL 講義の導入にあたり検討すべき事項

本学のカリキュラムでは，1 年生前期に多数の必修科目が配置されており，必修科目を新設することは難しい。そこで，既設の必修科目の中から，教師に求められる資質・能力およびそれを身につけるための自身の課題を理解することを到達目標として掲げている「教職論」に着目した。主体的・対話的で深い学びの実現に向け，学校現場で PBL の実践がこれまで以上に求められることは確実であり，その基礎を学ぶのに最適な科目だと判断したためである。

次に，講義の実施形態を検討した。教職論は 3 キャンパスそれぞれの実態に応じた講義内容，クラス編成，時間割で実施しており，web 会議システムを使ったとしても，特別講師がリアルタイムで一斉講義をすることは困難である。必然的に，事前に録画した講義動画を活用して実施せざるを得ない。しかしながら，学習者主体の学びである PBL 講義が，90 分間× 2 回分の講義動画を講義室に集まって（もしくはオンデマンドで）視聴するだけというのでは本末転倒である。そこで，動画視聴だけでなくペアワークを組み合わせた対話型講義として実施するこ

表 1　旭川校の授業計画

第 1 回：オリエンテーション・教育職員免許法と教育専門科目群の履修
第 2 回：教師の服務と責任
第 3 回：教師の資質と資格
第 4 回：新任教師の 1 年
第 5 回：子どもたちとどう向き合うか（学外講師：現職教員）
第 6 回：教師の仕事と家庭・地域（学外講師：現職教員）
第 7 回：教師の仕事・学校の仕事（学外講師：現職教員）
第 8 回：期待される教師像（学外講師：現職校長）
第 9 回：特別の支援を必要とする子どもたち（学外講師：現職教員）
第 10 回：【PBL 体験】「学びデザインシート」記入・対話（特別講師）
第 11 回：【PBL 講義】Project-Based Learning の基本と実践（特別講師）
第 12 回：各専攻・分野に分かれての講義（1）各学校種・教科教員に求められる資質・能力
第 13 回：各専攻・分野に分かれての講義（2）各学校種・教科教員に求められる専門知識
第 14 回：各専攻・分野に分かれての講義（3）各学校種・教科教員に求められる授業力
第 15 回：各専攻・分野に分かれての講義（4）各学校種・教科教員の入職後の力量形成のプロセス

【PBL 体験・講義】の説明動画の視聴（オンデマンド）
↓ 2 週間後締め切り
「ビジョンシート」の記入・提出
↓ 持参

ととし，各キャンパスの授業計画に無理を生じないことを前提に，後半に 2 回分の PBL 共通講義を組み込んでもらった（表 1 参照）。

最後に講義内容を検討した。2 回分の講義で PBL の全てを体験することはできないため，内容をかなり絞り込む必要がある。また，教職論として実施する以上，その到達目標の達成に資する必要がある。そこで，学生が「自分ごと」として取り組むことを期待し，「自分の好きや得意を活かした教育活動のできる教員になる」というビジョンを提示することとした。学生は，対話や情報獲得（ペアワーク）を繰り返しながら「“自分ならでは”のビジョンを具体的に描き」，その実現に向けた「自身の学びをデザイン」するという活動を行うことによって，PBL を体験しながら基礎を学ぶことができる（鈴木，2023）。この学びのデザインを言語化したものを成果物（アウトカム）として成績評価の対象とした。

“自分ならでは”の「好きや得意を活かす教育活動」をするというビジョンを描くからこそ，主語を自分とした対話や学びのデザインが可能となると考えたため，自分が受けてきた授業で良かったものや一般的に理想とされる授業を目指すのではないという点を繰り返し強調した。また，グループ活動に消極的な学生の中には，課題に対する「正解」を答えることを求められていると思い込み，PBL のような正解のない活動では全く発言できなくなってしまう学生が一定割合で含まれているとの報告がある（茂住，2023）。自分の好きや得意を話題とする意図を明確に伝えることで「正解」を求められているという不安を取り除き，対話活動（ペアワーク）に消極的な学生を一人でも減らすこともねらいである。

3. PBL 共通講義の実施

3.1　オリエンテーション

第 1 回目の講義では，各キャンパス担当教員がオリエンテーション（ガイダンス）を実施し，講義のねらいや到達目標，全 15 回にわたる講義内容，成績評価方法について説明する。その際，3 キャンパス共通で実施する PBL 講義の 2 回分は，実際に PBL 講義を担当する特別講師でなければその内容と成績評価基準を説明することが難しい。そこで，本学が導入しているオンライン教育プラットフォーム（LiveCampusU®，NTT データ九州，以下 LCU）に PBL 講義に関する資料一式を掲載することによって，履修学生が各自でダウンロードして確認するオンデマンド形式とした。同時に，各キャンパスの授業担当者には，15 回分の講義スケジュールを説明する際に「PBL 講義の 2 回分については，LCU から各自で確認するように」と指示するように依頼した。

掲載した資料一式は以下のとおりである。

○　ビジョン実現プロジェクトガイド
○　ビジョンシート（図 1）
○　学びデザインシート（図 2）
○　評価ルーブリック（図 3）

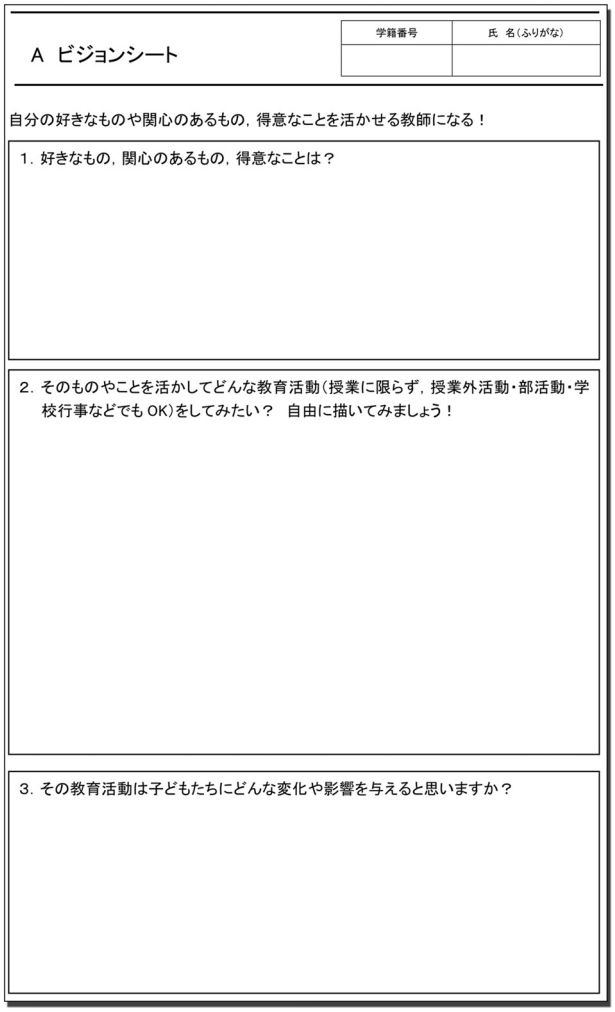
「ビジョン実現プロジェクトガイド（以下，ガイド）」には，PBL 講義の概要に加え，「ビジョンシート」および「学びデザインシート」の書き方（留意

点）が記されている。

また，特別講師によるガイダンス動画（5 分 30 秒間）を動画投稿サイトにアップし，その URL を LCU の掲示板ならびにガイドに記載した。この動画では，ガイドに沿って PBL の概説や本講義のねらいを示したのち，下記の 3 ステップで講義を進めていくことを説明している。

1.「自分を好きや得意を活かした教育活動のできる教師になる」というビジョンを思い描き，ビジョンシートに記述する
2. ビジョンを実現するためには何が必要かという視点を持って，教職論やその他の講義を受ける
3. 2 回分の PBL 講義では，ビジョンを実現するために対話を通して必要な知識，情報，学びを整理し，学びデザインシートに言語化する

講義の受け方への意識を変えさせるため，「1. ビジョンを描く」をできるだけ早く実施する必要がある。そこで，ビジョンシートの提出を第 1 回講義の



A ビジョンシート

学籍番号	氏 名（ふりがな）

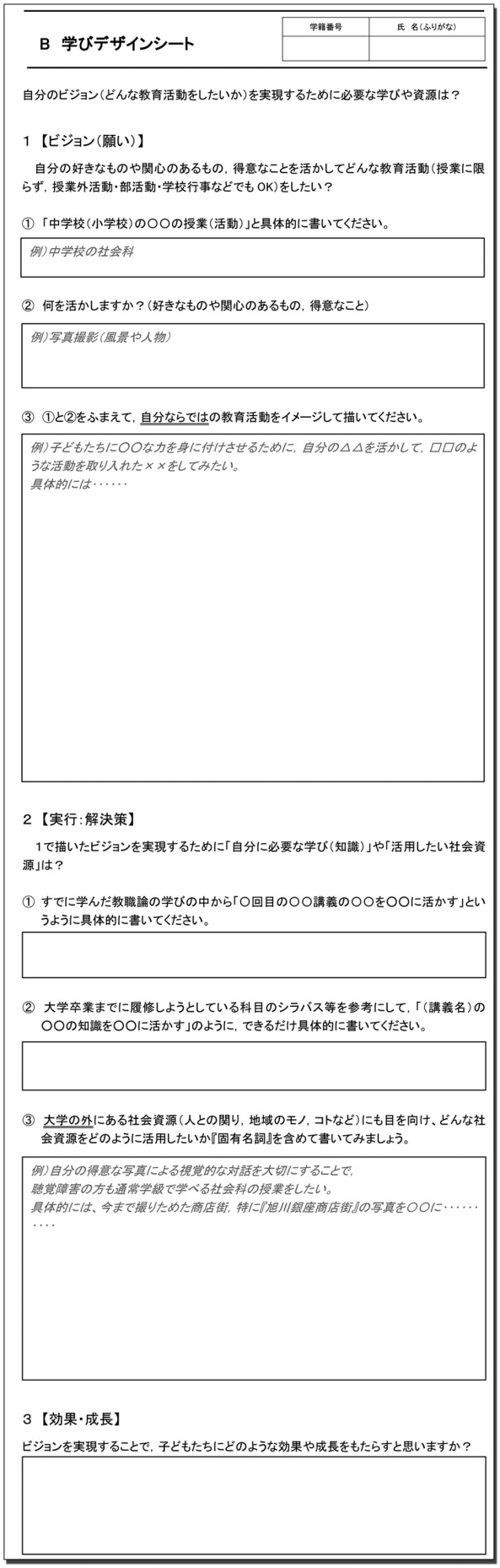
自分の好きなものや関心のあるもの，得意なことを活かせる教師になる！

1. 好きなもの，関心のあるもの，得意なことは？

2. そのものやことを活かしてどんな教育活動（授業に限らず，授業外活動・部活動・学校行事などでも OK）をしてみたい？　自由に描いてみましょう！

3. その教育活動は子どもたちにどんな変化や影響を与えると思いますか？

図 1　ビジョンシート



B 学びデザインシート

学籍番号	氏 名（ふりがな）

自分のビジョン（どんな教育活動をしたいか）を実現するために必要な学びや資源は？

1 【ビジョン（願い）】

自分の好きなものや関心のあるもの，得意なことを活かしてどんな教育活動（授業に限らず，授業外活動・部活動・学校行事などでも OK）をしたい？

① 「中学校（小学校）の〇〇の授業（活動）」と具体的に書いてください。

例）中学校の社会科

② 何を活かしますか？（好きなものや関心のあるもの，得意なこと）

例）写真撮影（風景や人物）

③ ①と②をふまえて，自分ならではの教育活動をイメージして描いてください。

例）子どもたちに〇〇な力を身に付けさせるために，自分の△△を活かして，□□のような活動を取り入れた××をしてみたい。
具体的には……

2 【実行：解決策】

1で描いたビジョンを実現するために「自分に必要な学び（知識）」や「活用したい社会資源」は？

① すでに学んだ教職論の学びの中から「〇回目の〇〇講義の〇〇を〇〇に活かす」というように具体的に書いてください。

② 大学卒業までに履修しようとしている科目のシラバス等を参考にして，「（講義名）の〇〇の知識を〇〇に活かす」のように，できるだけ具体的に書いてください。

③ 大学の外にある社会資源（人との関り，地域のモノ，コトなど）にも目を向け、どんな社会資源をどのように活用したいか『固有名詞』を含めて書いてみましょう。

例）自分の得意な写真による視覚的な対話を大切にすることで，
聴覚障害の方も通常学級で学べる社会科の授業をしたい。
具体的には、今まで撮りためた商店街，特に『旭川銀座商店街』の写真を〇〇に……

3 【効果・成長】

ビジョンを実現することで，子どもたちにどのような効果や成長をもたらすと思いますか？

図 2　学びデザインシート

評価対象	評価項目＝記載項目	3　良い	2　標準	1　最低限	0　不合格
学びデザインシート	**1【ビジョン（願い）】** 自分の好きなものや関心のあるもの，得意なことを活かしてどんな教育活動（授業に限らず，授業外活動・部活動・学校行事などでも OK）をしたい？ ①　「中学校（小学校）の○○の授業（活動）」と具体的に書いてください。 ②　何を活かしますか？（好きなものや関心のあるもの，得意なこと） ③　①と②をふまえて，自分ならではの教育活動をイメージして描いてください。	①と②をふまえて③が書かれていることが読みとれる。つまり①②と③の関連が明確に示されている。	①～③の全てで設問にあった内容が具体的に書かれている。	①～③の全てで設問にあった内容が書かれているものの，具体性に欠けている。	①～③のいずれかが未記入である。もしくは，明らかに設問とは無関係な内容が書かれている。
	2【実行：解決策】 1 で描いたビジョンを実現するために自分に必要な学び（知識）や有効な社会資源は？ ①　すでに学んだ教職論の内容の中から「○回目の○○講義の○○を○○に活かす」というように具体的に書いてください。 ②　大学卒業までに履修しようとしている科目のシラバス等を参考にして，「（講義名）の○○の内容を○○に活かす」のように，できるだけ具体的に書いてください。 ③　大学の外にある社会資源（人との関り，地域のモノ，コトなど）にも目を向け，どんな社会資源をどのように活用したいか『固有名詞』を含めて書いてみましょう。	③に書かれている社会資源（固有名詞）やその活用方法に，その人ならではのオリジナリティがある。	①と②が具体的に書かれており，かつ③には『固有名詞』が含まれている。	①～③の全てで設問にあった内容が書かれている。しかしながら，①や②で具体性に欠けている，もしくは③で『固有名詞』が含まれていない。	①～③のいずれかが未記入である。もしくは，明らかに設問とは無関係な内容が書かれている。
	3【効果・成長】 ビジョンを実現することで，子どもたちにどのような効果や成長をもたらすと思いますか？	子どもたちにとっての意義や価値に視点をおいた効果や成長を複数（多面的に）書けている。	自分がやりたい教育活動と子どもに与える効果，成長の繋がりが読みとれる。	設問にあった内容が書かれているものの，具体性に欠けている。	未記入である。もしくは，明らかに設問とは無関係な内容が書かれている。

図 3　学びデザインシートの評価ルーブリック

課題とした。2 回目以降の教職論の講義，特に後半に設定されている PBL 講義を受講するうえで非常に重要であること強調し，提出を促した（提出締め切りは約 2 週間後に設定）。

3.2　ビジョンシートをもとにした講義づくり

成績評価には反映しない任意提出の課題としたにもかかわらず，履修者 662 名のうち 643 名からビジョンシートが提出された（提出率 97.1%）。オンデマンド形式であったものの，各学生が指示に従って資料を確認し，またガイダンス動画を視聴し，その内容を理解したことを示すものである。

提出された 643 名分のビジョンシート全てに目を通し，趣味がユニークであり，かつそれを活かした教育活動をかなり具体的に記述していた学生を 1 名抽出した。この学生に講義づくりへの協力を依頼したところ快諾を得たため，特別講師のオフィスと当該学生の指導教員の研究室を web 会議システムで接続し，指導教員も交えた面談を実施した。約 90 分間にわたった面談では，特別講師が学生と対話をしながら PBL の基本や特徴を説明するとともに，最終的に学生自身が学びデザインシートに何を書けばよいかを理解する過程を録画した。これを編集することで，講師と学生の対話形式を基本とする 2 回分の PBL 講義動画を作成した。対話形式にこだわったのは，ペアワークを進めるうえで必須となる対話コーチングを実演することに加え，自分たちと同じ履修者の 1 人が講師と実際にやり取りをしている様子を観ることが臨場感につながるためである。

3.3　PBL 体験
～「学びデザインシート」の記入と対話

PBL 講義の 1 回目は表 2 に示すような流れで構成し，35 分間の動画を視聴することから始めた。この動画では，まず Subject-Based Learning との比較において PBL の最大の特徴である「正解なき学び」そして「意志ある学び」を説明し，児童・生徒の考える力を高めるという PBL における教師の役割を果

表 2　PBL 講義の進行

【PBL 体験】「学びデザインシート」記入・対話
1. 動画：PBL の特徴，学習者の考えを引き出す対話，コーチング，学びのデザイン
2. 個人活動：学びデザインシートを記入
3. 動画（対話モデル）：対話コーチングのやりかた，ポジティブフィードバック
4. ペアワーク 1：学びデザインシートのプレゼン・対話，フィードバック
5. 担当者による指示：次回の予告，持ち物

【PBL 講義】Project-Based Learning の基本と実践
1. 動画：PBL の基本と実践，PBL の情報獲得，ペアワーク 2 の進め方
2. ペアワーク 2：スパイダーマップの作成，対話，フィードバック
3. 動画：AI 時代の教育，意志ある学び―未来教育
4. 担当者による指示：成長確認の入力（学生の自己評価），課題提出について

たすには対話コーチングが必要不可欠であることに焦点を当てた。続いて，前述の学生との対話を通じて①ビジョンと目標の明確化（鈴木，2012），②現状の把握，③目標と現状のギャップを課題に設定，④課題解決に向けて獲得すべき情報の精査といった PBL の基本フェーズに沿った思考プロセスの理解を図った。相手の考えを引き出すための声かけや相手への共感を示す表情や振る舞いといった対話コーチングの基本やポイントには，解説や字幕を入れるなどして印象づける工夫をした。最後に，学びデザインシートの書き方を説明した。“自分ならでは”のアイデアを書いた方が高評価となることを伝え（図 3 の評価ルーブリック参照），自分の学びデザインに活かすという観点で，これまでの教職論で学んだ内容を振り返ったり，これから学ぶ講義のシラバスを俯瞰したり，地域の社会資源を探索したりすることで，できるだけ「固有名詞」をあげて具体的に記述することを促した。

動画視聴終了後，持参したビジョンシートをもとに，これまでの講義内容や地域の社会資源にも目を向けながら，各学生が学びデザインシートを記入するという活動を 20 分間で実施した。この後の活動において自分の好きや得意を活かした教育活動を伝え合い，互いにフィードバックをもらうことが目的であるため，現時点では思いつくままに書けばよいこととし，完成版を提出する機会は改めて設けることを伝えた。しかしながら，学生便覧や情報端末を持ち込み，熱心に調べながら記入する学生も少なからず見られた。

学生が学びデザインシートをおおよそ書き終えたのち，対話コーチングを実践するペアワーク 1 の説明動画（8 分間）を視聴した。この動画は，学校現場の現職教員 2 名によるロールプレイング（対話モデル）がメインとなっている。話し手は自身が書いた学びデザインシートをもとに，自分の好きや得意を活かした教育活動を相手に熱意をもって伝え，聞き手は対話コーチングを意識して，共感を示しながら傾聴したり，価値やモチベーションを高めるコメントを返したりという内容である。

引き続き，近くの学生同士（ペア）で対話を実践するペアワーク 1 を 20 分間で実施した。話し手と聞き手の役割分担を決めた後，対話コーチングの実践を行った。聞き手は対話の中でコメントを返すことに加えて，A4 サイズの白紙にコメントを記入したポジティブフィードバックシートを作成し，実践終了後に話し手に渡すこととした。一連の実践を終えたら，役割を入れ替えてもう一度実践を行った。ペアワークの時間には，自分の好きや得意を相手に理解してもらおうと熱く語っている様子が至るところで見られ，ほぼ全ての学生が積極的に取り組んでいるのみならず，何より対話活動を楽しんでいるとの印象を持った。やはり，相手のモチベーションを上げる「価値発見」とビジョン実現に役に立つ「知の提供」がアクティブな対話のカギだといえる。

最後に，各キャンパスの授業担当者が次回（PBL 講義 2 回目）の講義内容の予告と持参する物の指示をして，PBL 講義 1 回目は終了である。

3.4　PBL 講義 ～Project-Based Learning の基本と実践

PBL 講義の 2 回目も表 2 に示すような流れで構成し，36 分間の動画を視聴することから始めた。この動画では，資料[1]を参照しながら，PBL の基本と各

フェーズを前回よりも詳しく説明している。特に強調して伝えたのは以下の3点である：①学習者が意志をもって進めるためにビジョン（目的）とゴール（目標）が明確であること。②成果は新たな価値を生みあげる知のアウトカムとして社会へ提案するものであるということ。③ビジョンから目標へ向かう過程で手に入れた知識, 情報, アイデアをポートフォリオとして一元化し俯瞰することが重要であること（鈴木，2017）。次に，特別講師がこれまで手がけたPBL実践事例を紹介するとともに，実際に担当した教諭や大学教員が出演し，PBL実践後の生徒（児童，学生）に見られた主体性の高まりという観点から，学校現場でPBLを実施する意義を語りかけた。続いて，自分の好きや得意を活かした教育活動を実現するために必要な大学内外での学びに絞り（学びデザインシートの2②と③，図2），再び学生との対話形式でPBLでの情報獲得のフェーズについて具体的な説明を行った。その際，デジタル空間だけではなく, 実際に現場に行き, そこで人と話をするといった現実から情報を獲得する重要性を強調した。また，関連しそうな大学講義を探索する部分では，大学教員も加わり，LCUによるシラバス検索のデモンストレーションを行った。実際に受講できるかどうかを現時点では気にせず，大学4年間を見通して関連講義を積極的に見つけることを目的とした。

動画視聴後，学びデザインシートの完成に向けて視野をさらに広げることを目的とした20分間のペアワーク2を実施した。まず，“自分ならでは”の教育活動（学びデザインシートの1，図2）を的確に表すキーワードを1つA4サイズの白紙の中央に書き，そのキーワードから連想される，派生する，関連すると思われるワード（言語，知識，方策など）を線でつなぎながら周囲に発想力や想像力豊かに次々と書いていく，いわゆるスパイダーマップ（コンセプトマップ）を作成した。ワードを思いつく限り書いたら，隣同士でマップを交換し，相手のマップに最低3つ以上のワードを追加したのち，ペアで対話をしながら各ワードに関連しそうな講義や地域の社会資源を探索した。ここまでで，成績評価の対象となる学びデザインシート（アウトカム）を完成させるために必要な準備を全て終えたことになる。

学生同士の対話がおおよそ終了したら，12分間の動画を視聴した。1人1台端末の実現や生成系AIの登場によって，与えられた学びから意志ある学びへの変革期を迎えるなか，学びの価値を自分自身で創造するPBLの重要性がますます高まるのは確実であるという現職教員から教職を志す大学1年生へのメッセージ，特別講師による講義のまとめと未来の教育を担う学生へのメッセージなどが伝えられ，一連の講義動画は終了となった。

最後に，成績評価の対象となる最終課題（学びデザインシート完成版）の提出について，各キャンパスの授業担当者が指示をした。加えて，学生に成績評価にかかわる課題とは別であることを明確に伝えつつ，自身の振り返りに役立つことはもちろん，大学の授業改善に資するものとしてPBL講義を通じた成長確認の自己評価（webアンケート）に対する任意での協力を依頼し，終了となった。

4. 成長確認（学生の自己評価）

2回のPBL講義を終えた後，受講生にQRコードを配付し，回答任意かつ無記名のwebアンケートを実施した。今回のPBL講義で重点を置いた7つの力と一般的なPBLの各フェーズで身につけることのできる35個の力（鈴木, 2017）を一覧として示し，その中から高めることができたと思うものにチェックをつけることで学生自身が自己評価を行うものである。併せて，感想や意見を記載する自由記述欄を設けた。成績評価とは無関係であることを明確に伝えつつ，各学生が時間のある時に回答するという指示であったが，講義の最後に入力のための時間を確保してくれた担当者が多かったこともあり，547名から回答を得ることができた（回答率86.7%）。

回答者がチェックした割合を集計し，重点を置いた7つの力の結果を表3に，PBLで一般的な35個の力の結果を表4にそれぞれ示す。60%以上の回答者がチェックを付けた“力”（回答率をもとに，**履修者のうち少なくとも半数以上**の学生が向上を実感できた力）に着目すると，「自分の未来への想像力」や「ビジョンを描く心」の向上を実感できたのは，真剣にビジョンシートへ向き合ったことの証左であろう。「“自分ならでは”を表現する力」，「目標を具体

表 3　学生が向上を実感できた力
（今回重点を置いた教職に関連する力）

教師を目指す意識	62.5%
自分の未来への想像力	71.6%
学習意欲の高まり	39.2%
自ら情報を獲得する力	33.8%
子どもたちへの影響を推測する力	41.6%
子どもたちをイメージする力	33.3%
“自分ならでは”を表現する力	63.1%

回答者 547 名

表 4　学生が向上を実感できた力
（PBL の各フェーズで身につく一般的な力）

【準備】	
ビジョン（願い）を描く心	71.4%
自ら課題を発見する力	57.8%
現実直視・気づく力	44.1%
現実を俯瞰して，総合的にとらえる力	36.6%
社会の現状を知ろうとする姿勢	35.9%
【ビジョン・ゴール】	
ビジョン力，価値ある目的へぶれない姿勢	51.6%
具体的な「目標」を決定できる力	61.0%
チャレンジ心	39.9%
社会の課題を自らと重ね合わせて考える力	43.2%
【計画】	
俯瞰力	47.0%
戦略的な計画力	38.3%
すべきことを自ら考え出せる力	66.9%
【情報・課題解決】	
根拠ある情報を獲得する力	38.7%
情報を取捨選択する力	37.3%
情報獲得につながるコミュニケーション力	50.3%
多面的に物事を見る力	55.6%
企画力・発想力	53.3%
根拠ある情報を活かして解決を図る力	29.1%
【制作】	
必要なことを簡潔に文章にできる力	49.5%
アイデアをユニークに表現できる力	50.3%
行動や思考を具体的・論理的に表現する力	45.8%
【プレゼンテーション（知の共有）】	
根拠をもとに説明する力	56.8%
インタラクティブなプレゼンテーション力	27.7%
聞き手の理解や思いを推察しつつ話せる力	55.6%
役立つコメントを提供できる力	35.0%
【再構築】	
有効なフィードバックを活かす改善力	59.6%
ゼロから考えることができる論理的な力	51.0%
【成長確認】	
達成感	54.2%
やり遂げる意志	45.5%
より成長しようとする意欲	57.5%
自信・自己肯定感・自尊感情	30.8%
自分の得意や個性，能力の見出し	43.6%
次へのビジョン，挑戦心	52.1%
他者への敬意・感謝の心	39.4%
客観的に自分を見る力	42.7%

回答者 547 名

的に決定できる力」，「すべきことを考え出せる力」の向上を実感できたのは，対話活動（ペアワーク）に熱心に取り組んだ結果だといえる。特筆すべきは，「教員を目指す意識」が向上したことである。教員志望率が最も高い 1 年生前期（入学直後）にもかかわらず，教職志向をより一層強固なものとしたことに意義があり，教員就職率向上への端緒となり得る。一方，学習意欲（39.2%），情報獲得力（33.8%），子どもたちをイメージする力（33.3%）は，重点を置いたものの効果が得られたとはいえず，今後の改善が必要である。

回答者 547 名のうち 425 名からは自由記述欄に意見や感想が寄せられた。記述内容の特徴や傾向を可視化するためのテキストマイニングを実施し，30 回以上出現する頻出単語を抽出して共起ネットワークを作成した[2]（図 4）。この図では円の大きさが出現頻度（最多の「自分」は 445 回），距離の近さが関連の強さを表していることから，「自分の好きなことが授業につながると知って楽しかった」，「好きなことをどんなふうに教育現場で活かすかについて考えることができて良かった」といった将来の教員就職に向けて肯定的な感想が多数を占めていることが読みとれる。また，「ペアで意見を交流することで自分にはない知見を得ることができて視野が広がった」など，ペアワークでの対話活動に多くの学生が意義を感じたことが示唆される。他には，「今回の PBL では自分の趣味・興味のあることを授業に活かせることに驚いた」，「特別講師（先生）が話を聞く姿勢，特に表情，しぐさ，声かけなどが印象に残った」，「学生と一緒に進んでいく動画だったので分か

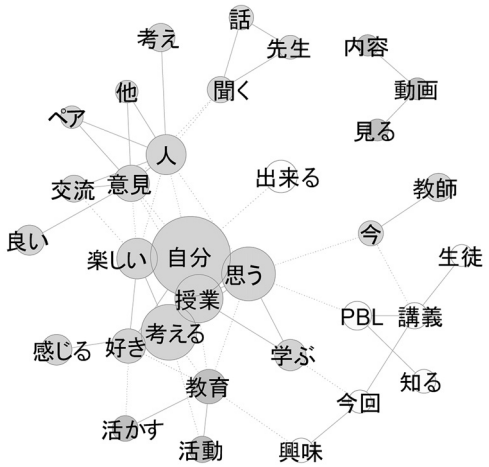


図 4　学生自己評価の共起ネットワーク

りやすかった」など，学生の好きを出発とするテーマ設定や特別講師と学生による対話形式の動画は好評だったといえる。一方，ペアワークの時間を確保するために講義動画を 1.2 倍速で再生したクラスもあったように，動画が長いとの指摘が多数寄せられた。扱う内容を精選するなどの改善が必要である。

5. まとめ

PBL の基礎を学ぶことに加え，「自分の好きや得意を活かした教育活動のできる教員になる」をビジョンとすることで教職志向を高めることを目的として，教員養成課程の大学 1 年生を対象とした「教職論」に PBL 講義（90 分× 2 回）を導入した。具体的には，対話や情報獲得によって自分の好きや得意なことを教育活動に活かすという観点で言語化するとともに，教員就職に向けた大学内外での自身の学びをデザインするという内容であり，主体的・対話的で深い学びの実現に向けた短期的な教員養成プログラムともいえる。

講義を終えた学生の自己評価を分析すると，回答した学生の 60％以上（履修者の少なくとも半数以上）が「教員を目指す意識」が高まったと回答している。さらに，自由記述欄からは将来の教員就職に向けて肯定的な感想が多数を占めており，教職志向がより一層強固になったことや自身の描く未来に向かって主体的に学ぶ意識の向上が読みとれる。今後，この教職志向の高まりを維持するため，4 年間を通じた体系的な PBL 科目の配置と実施が必要であろう。

謝辞

講義動画の作成にご協力いただいた溝渕慶一郎氏（北海道教育大学旭川校・学部 1 年生），大野睦仁氏（札幌市立平岡中央小学校・教諭），矢橋佳之氏（北海道稚内高等学校・校長），金井義明氏（熊本大学大学院教育学研究科・准教授），及川美幸氏（墨田区立両国中学校・主幹教諭），伊藤祐一郎氏（墨田区立両国中学校・主幹教諭），夏原和美氏（東邦大学看護学部・教授）にこの場を借りて深謝申し上げます。

また，学生への指示，動画再生を含む講義の進行や事後アンケートへの回答など，各キャンパスで教職論をご担当されている先生方には多大なご協力を頂きました。厚く御礼申し上げます。

注

1　著者の web サイトからダウンロード可能である（https://suzuki-toshie.net/dl/A_202306.pdf）。
2　共起ネットワークは KH Coder 3 を用いて作成した（https://khcoder.net）。

文献

北海道教育大学（2022）．第 4 期中期目標期間（令和 4 年度～令和 9 年度）中期計画（令和 4 年 3 月 30 日認可）Retrieved August 31, 2023 from https://www.hokkyodai.ac.jp/files/00009400/00009430/4th_keikaku_20220330.pdf

文部科学省（2022）．公立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針に基づく教師に共通的に求められる資質の具体的内容（令和 4 年文部科学省告示第 115 号）Retrieved August 31, 2023 from https://www.mext.go.jp/content/20220831-mxt_kyoikujinzai01-000024760_3_4.pdf

茂住 和世（2023）．初年次 PBL のグループ活動で見かける「地蔵」的学生―なぜ彼らは「地蔵」になってしまうのか―　高等教育ジャーナル―高等教育と生涯学習―，(30)，1–15.

鈴木 敏恵（2012）．プロジェクト学習の基本と手法―課題解決力と論理的思考力が身につく―　教育出版

鈴木 敏恵（2017）．AI 時代の教育と評価―意志ある学びをかなえるプロジェクト学習ポートフォリオ対話コーチング―　教育出版

鈴木 敏恵（2023）．DX とポートフォリオで未来教育―対話でかなえる学びとキャリアのデザイン―　日本看護協会出版会